

年間第十七主日

2015.7.26

ヨハネ 6・1-15

今日から五回の主日にわたって、ヨハネ福音書6章に語られている、わたしたちの信仰にとって大切な一つのテーマを追って、御一緒に味わってまいりませう。そのテーマとは、イエスこそがわたしたちのいのちのパンであるということです。

今日も猛烈な暑さの中、やっとの思いでわたしたちはこのミサに集まって来ましたが、わたしたちがこのようにここに集っているのは、それが、カトリック信者としてのわたしたちの義務であるからだけではないはずです。長年の習慣のようになっていて、日曜日の教会のミサに行かないと、何か悪いことをしたかのように、気持ちがすっきりしないからだけでもないと思います。確かに、やっとの思いで日曜日の教会に来ることが出来たら、それだけでも、なすべきことをすることが出来た達成感とか満足感を味わうことが出来るかもしれません。けれども、わたしたちがこのミサに集うことによって求めていることはそのようなことだけでありません。

今日の福音には、ガリラヤ湖の向こう岸に渡られたイエスの後を追って、イエスのもとに馳せ集った大勢の人々のことが語られています。ここに集うわたしたちも、ある意味で、ガリラヤ湖の向こう岸におられるイエスを追い求めた人々のようであるとは思えないでしょうか。わたしたちは自分たちが何かをするためにここに集っているではありません。イエスを追い求めてガリラヤ湖を渡った人々にとってそうであったように、わたしたちの暮らしはガリラヤ湖のこちら側にあるのです。日曜日であっても、わたしたちに絡み付いてそこから抜け出すことの容易ではない、ガリラヤ湖のこちら側のわたしたちの暮らしを捨ておいてでも、ガリラヤ湖の向こう岸とでも言える、普段の生活から隔絶されたような日曜日の教会に集ったのは、わたしたちもイエスを追い求めている者たちだからです。ガリラヤ湖の向こう岸に渡って、そこで人々を迎えられたイエスは、あの時と同じように、このミサの中でわたしたちを迎えておられるのです。

先週のミサの中で聴いたマルコ福音書は、今日のヨハネ福音書が語るパンの奇跡の直前の様子を語っていました。思い出してみると、そこには次のようなことばが響いていました。

「イエスは舟から上がり、大勢の群集を見て、飼い主のいない羊のような有

様を深く憐れみ、いろいろと教え始められた」。マルコ福音書が語るパンの奇跡は、このようなイエスの思いを伝える前置きのことばによって始まっているのです。ガリラヤ湖の向こう岸に人々が求めたイエスはこのようなお方です。その人々に注がれているイエスの眼差しはこのような眼差しです。このミサに集うわたしたちもそのようなイエスを追い求め、そのようなイエスと出会わせていただきたいと思います。

もう少し今日の福音の語りだしの部分にこだわってみると、そこには次のように語られています。

「イエスは山に登り、弟子たちと一緒にそこにお座りになった。ユダヤ人の祭りである過ぎ越し祭が近づいていた。イエスは目を上げ、大勢の群集が御自分の方へ来るのを見て・・・」 弟子たちとともに山の上におられるイエスは、そこから、ご自分のほうに近づいてくる人々を見下ろす位置におられるはずなのに、目を上げてその人々をご覧になるとは、少し奇妙なように思われます。目を上げて見るとは、下から見上げるということになるのではないかと思えるからです。イエスの目には牧者のいない羊たちのように見える人々の群れを、イエスは山の高みに座って、憐れみの眼差しで見ておられるだけではありません。イエスは良い牧者として羊の群れの中に身を投じ、群れと一体となって、緑の牧場を求めて目を上げていてくださるのです。良い牧者であるイエスにとって、羊たちの群れは、父なる神がその御子イエスにお与えになった、そのためには御自分のいのちを犠牲にすることも厭わないほどに貴重なものなのです。イエスはその羊たちの群れの中であって、その羊たちの世話にいのちをささげながら、その群れを御自分にお与えなった父なる神に向かって目を上げておられるのです。

わたしたちのカトリック信者としての信仰は、そのようなイエスがこのミサの中にもともにいてくださり、わたしたちを今日もそのいのちのパンに招いていてくださることを信じる信仰です。

「過ぎ越し祭が近づいていた」という、一見、前後の文脈に大きな影響がないように思えるコメントにも、深い意味が隠されているように思えます。ヨハネ福音書にとっての過ぎ越し祭とは、単にユダヤ人の祭りとして過ぎ越し祭であるよりも、過ぎ越しの祭りの時に、過ぎ越しの小羊としてイエスが十字架に上られたことに圧倒的な意味があるのです。

最初にも言いましたように、これからの五回の主日のミサにわたって、ヨハネ福音書の6章を集中的に味わってまいります。ヨハネ6章で繰り広げられてゆくイエスとユダヤ人たちとの対話は、イエスが与えるパンにはどのような

意味が込められているのかということ巡って展開されています。そしてそれは、私たちがミサの度ごとに拝領している、イエスが与えてくださるいのちのパン、イエスがその十字架を通して与えてくださった、イエスのいのちそのものであるご聖体へと集約して行くのです。

他の福音書にも同じように語られている、今日の福音のパンの増加の奇跡の物語は、私たちが今日聴いたヨハネ福音書においては、単に、かつてイエスがガリラヤ湖向こう岸で行われた奇跡の物語を伝えているだけではなく、私たちがその中に招き入れられている、私たちのカトリック信者としての信仰を根幹から支えている信仰の神秘へとより深く私たちを招き入れる福音なのです。

この暑さの中、今日もこうしてこのミサに集うことが出来た私たちは、ガリラヤ湖の向こう岸までイエスを追い求めて行った人々が、イエスの手ずからイエスによって分け与えられるパンに満たされたように、敬虔な気持ちで、慣れ親しんだご聖体のパンに近づかせていただきたいと思います。私たちが今日もいただくご聖体のパンが、この日々を生きる私たちにとって、真にいのちのパンとなることを願って、イエスの過ぎ越しを祝うこのミサをともにおささげしたいと思います。

カトリック高円寺教会
主任司祭 吉池好高